

序文

中川 裕

今日ではフィールドワークによるアイヌ語の研究が、すでにかなり困難な状況になっていることは、アイヌ語学に携わっているものにとっては、いまさら言うまでもない事実となっている。もちろん、単語や短文レベルでアイヌ語を記憶している人はまだ何人も確認でき、それらの人たちから得られるデータにはまだまだ重要性がある。また、アイヌ語自体は記憶していない人でも、その生活体験や、年上の世代の人たちの言葉や行動の記憶が、アイヌ文化の理解に貴重なものであることも、言を俟たない。

しかし、アイヌ語の研究がフィールドワークを中心に行われてきたことは、いささかバランスを欠いたものであったということも、多くの人が気づき始めていることである。アイヌ語には、すでに膨大な音声資料や文字資料の蓄積がある。しかし、それが十分に活用されているかというと、とてもまだそういえる状況ではない。

一例を挙げれば、金田一京助は「原始文学としてのユーカラ」(1935) (『金田一京助全集』第7巻、三省堂、1992 所収) において、「ユーカラ目録」として、80 編の英雄叙事詩の表題を挙げている(そして、さらに数十篇の表題のない伝承があるという)。このうち、金田一自身が採録した資料として原文テキストが公開されているのは、「虎杖丸の曲」「蘆丸の曲」「草人形」「八串の肉串いくさ物語」の4 編だけで、カラフトのハウキの唯一のテキストである『北蝦夷古謡遺篇』を入れても5 編である。

一方、その目録の中には金成マツのノート中のものが含まれている可能性があるということは、遠藤志保氏が指摘している。金成ノートについて、金田一は『ユーカラ集』第1 巻の解題で英雄叙事詩 92 編が含まれていると記しているが、金成マツのノート執筆期間は1928 年から1944 年ということなので、その全部が1935 年に書かれた「ユーカラ目録」の中に入っていることはない。では、この「目録」の中に彼自身が記録したテキストはどれくらい含まれているのか？

金田一の採録資料に関しては、北海道立図書館が「金田一京助採録・ユーカラ・ノート」41 冊を、マイクロフィルム6 本に収めたものがあり、『北海道立アイヌ民族文化研究センター 研究紀要』第13 号(2007) で、林誠氏が「北海道立図書館所蔵マイクロフィルム『金田一京助採録・ユーカラ・ノート』の細目次」として詳細にまとめあげたものによって、その概要をうかがうことができる。では、その「ユーカラ・ノート」の中に、「ユーカラ目録」に挙げられているもののテキストがどのくらい含まれているのか？ こういった基礎的な研究が、金田一没後40 年以上経った現在でも、あるのかどうか寡聞にして知らない。

それどころか、あれだけ世間に広く知られ、アイヌ英雄叙事詩の基礎的なイメージを作り、

歴史学の分野でも参照されている『虎杖丸の曲』について、たとえば出現単語の一覧ぐらい、とうに出来ていて然るべきだろうと思われるが、いまだにあるの知らない（個人的に作っている人はいるだろうが）。つまり、金田一京助の評伝や研究姿勢についての批評はいろいろあるが、アイヌ語研究の視点から彼の成したことの全貌を把握する作業は、誰もまだ始めていないのではないかとすら思われる。

もちろんこれは自戒を込めていっているのであって、それらは本来我々アイヌ語研究者がやらねばならない仕事のひとつであるが、私自身、自分が記録した音声資料の整理で手いっぱい、文字資料の研究は後回しにしてきた。

文献資料として扱うべきものは、文字資料だけではない。他の消滅危機言語と比較すると、アイヌ語は例外的に音声資料に恵まれている言語である。それは早い時期から録音機器が手に入りやすいものとなり、放送局や研究機関のみならず、一般の人でも気軽に録音ができる環境があったことによる。その音声資料に関しては、近年整備も盛んに行われてきて、公開されるものも増えてきた。これは大変喜ばしいことである。しかし、音が聞ければただちに活用できるというものではない。たとえ音と同時にテキストやグロスが公開されているものであっても、それを研究資料として活用するためには、その聞き取りや解釈が妥当なものであるかどうかの吟味・分析が必要になる。

また、採録者が自ら公開しているような場合にはまだいいが、そうでないものについては、それが、いつ、誰が、誰から採録したものが不明なものも多い。異なる資料として記録されているものが、実は同じ資料の複製であるという場合もある。そういったものを整理して、より資料価値の高いものにしていく、いわば「原典批評」というものも、音声資料に関しては必要になってくる。

このように課題としては山積みなのだが、裏を返せば、アイヌ語を研究しようという人たち、あるいはアイヌ語に基づいてアイヌ文化・アイヌ文学などを研究しようとする人たちにとっては、誰も中身を見たことのない宝箱が、山のように積まれているということである。それらを分析し、一般の人が利用しやすいような形で公開していくことは、アイヌ文化の振興にも寄与することであるのは疑いない。

本研究プロジェクトは、このような、これからのアイヌ語文献研究の重要性を見据え、これまで記録されてきた音声資料・文字資料をすべてその対象とを考えて、それを活用するための様々な試みを行ったものである。この報告書では遠藤志保氏、深澤美香氏が、それぞれ異なったアプローチでアイヌ語文献研究の可能性を探っている。本研究プロジェクトがこれからのアイヌ語・アイヌ文化研究の礎となるようなものになることを、期待してやまない。

なお、本報告書は深澤美香氏が編集を担当した。